



TITLE:

# <批評・紹介>羽田博士史學論文集 下巻 言語宗教篇

AUTHOR(S):

小林, 高四郎

---

CITATION:

小林, 高四郎. <批評・紹介>羽田博士史學論文集 下巻 言語宗教篇. 東洋史研究 1959, 18(1): 95-99

ISSUE DATE:

1959-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148129>

RIGHT:

わが國の學界がそれを行う機会を逸してしまつて、動亂によつてチベットの文献が失われつつあるのを見ると、くれぐれも残念でならない。

とまれ偉大な著者の努力と學識に驚嘆するばかりである。同時に、このような特殊な分野についての研究を育成せられた京都大學の故羽田總長をはじめ諸教授に對して、ただただ敬意を表する次第である。最後に、一日も早く下巻が上梓せられて完結せられんことを念願してやまない。

(稻葉正就)

羽田博士史學論文集 / 下巻 言語・宗教篇

昭和三十三年十一月 東洋史研究會發行  
A5版 本文六八六頁 圖版十八頁  
索引五四頁 佛文要旨一一七頁

羽田亨先生が中國、塞外、中央アジア史家として、民族・言語・文化・藝術等の各方面に亘り、東西兩洋の一巨峯であつたことは、贅言を須いしない。然し博士生前發表の諸論攷中には、既に入手閱讀するに困難を歎ぜざるを得ないものがあつた。先生易簣後、幾年も出でずして、受業門下の諸位と三島海雲氏の義舉とにより、曩に上巻歴史篇が刊行され(昭和三十三年)、ついで今、下巻言語・宗教篇の巨冊が上梓されて、學界積年の渴望が滿された。先生が遺された論文のどれ一つとして、その考證の嚴正・博洽ならざるはない。ために單に紹介の爲め一讀するさへ、質・量共に洵に容易の業ではない。加うるに故博士の講筵に侍した日なく、かつウイグルの歴史、言語の專家でない筆者は到底、紹介の任ではない。これには他に自ら人の

あることは、最もよく自覺する處である。にも拘らず敢えて蕪陋の一文を草する所以は、先生との多少の因縁からである。

一九四二年、筆者がトルコ赴任に際し、會々歸洛の博士と同車するの榮に恵まれたが、その折、トルコに於いては、當時アンカラ大學に在つたトルコ語學者 Fr. von Gabain につくべきを教えられた。着任してからは、些かこの國の言語を學び、同女史をも識り、また Dr. Rahmet により日本現在ウイグル文書と羽田先生のこれが研究論文リストの作成を依頼されたことがあつた。筆者はかかる因縁から當時戰爭のため入手し難かつたトルコ語學會刊、Kudaku Blik 一部三冊(ラドロフ、フェルガー)を速く先生に獻じたことであつた。筆者はこうした自己感慨から、紹介をお引受けしたものの、辛うじて大著の全貌をただ目録的に羅列して、責を免るの外はないことを豫め愿ひして戴きたい。

まず本書の結構を示す(便宜上、論文に通し番號を附す)。

- 1 回鶻文字考
- 2 突都語の回鶻碑文
- 3 回鶻文女子賁渡文書
- 4 回鶻文の佛典に就て
- 5 回鶻文の天地八陽神呪經
- 6 回鶻文法華經普門品の斷片
- 7 回鶻譯本安慧の俱舍論實義疏
- 8 トルコ文華嚴經の斷簡
- 9 日本に傳はる波斯文に就て
- 10 新波斯教殘經に就て
- 11 景教經典一神論解説

- 12 景教經典序聽迷詩所經に就いて
- 13 景教經典志玄安樂經に就いて
- 14 大秦景教大聖通真歸法讚及び大秦景教宣元至本經殘卷について
- 15 ル・コック氏著摩尼教遺文卷三  
吐魯番回鶻文摩尼教徒祈願文の斷簡
- 16 漢譯の佛典について
- 17 釋迦牟尼如來像法滅盡之記解説  
書後
- 18 唐故三十姓可汗貴女阿那氏之墓誌
- 19 波斯國酋長阿羅憾丘銘
- 20 漢蕃對音千字文の斷簡
- 21 契丹文字の新資料
- 22 華夷譯語の編者馬沙亦黑
- 23 五體清文鑑
- 24 清文鑑和解・翻譯滿語纂編解説
- 25 蒙古族の宗教的風俗習慣・附蒙古の巫人
- 26 北方民族の間に於ける巫に就いて
- 27 トルコ族と佛教
- 28 天と祇と祈連と
- 29 舞樂の渾脱といふ名稱につきて
- 30 舞樂の渾脱といふ名稱につきて
- 31 舞樂の渾脱といふ名稱につきて

# 雜 纂

ペリオ (Peliot) 氏の中央亞細亞旅行  
大谷探險隊の成果  
二樂叢書第一號を読む  
西域考古圖譜

中亞史研究資料の探訪

樹下人物圖について

外蒙古におけるコズロフ氏の發掘

莫斯科抄書の思い出

史料蒐集家としての内藤博士

桑原博士「東洋文明史論叢」序

白鳥博士の思い出

濱田君の追憶

OBITUARY NOTE KÔSAKU HAMADA

東方文化研究所と狩野博士

ラードロフ博士

レギー博士の憶出

我が國の東方學とペリオ教授

最近露都通信

アレキサンダー三世博物館

英京の一隅より

匈牙利の夏の旅

巴里でした正月

塞北行紀の一節

書き抜きを捜しながら

聚樂廻り

賢所御神樂の儀

以上に附するに口繪圖版一五圖、索引五四頁及び嗣子明教授が  
A. Brunet 氏の協力をえて作成された論文の部の簡明流達な佛文レ

ジュメ(上巻の部三三篇分七〇頁)を以てなる。

1は博士の學位請求論文「唐代ノ回鶻ニ關スル研究」の第三篇として、全篇章を分つこと四、ウイグル文字の史的考察にして、本文字がソグトに由來するを考證したもので、フォン・ガバイン女史の「Altirkische Grammatik」について文法を修むる者が必ず相並んで參考すべき好篇である。

2は從來 Kara Balgssun のウイグル碑文はトルコ語で書かれたものと信ぜられたが、一九〇九年 Müller は、文字はウイグルのものであるが、言語はソグド語であることを唱道した。博士はこの碑文を重要視し、ソグド語がマニ教の東漸と時代を同うして東方に普及したことを論究された。

3 橋瑞超氏が Kara-Khotja 附近にて發見の時代不詳、恐らく元以前のもと考えられる二三行の女子寶買文書につき解説し、譯註されたもの。

5 橋氏が Yarkhoto で發見したものをラテン字轉寫し漢譯と對比しつつ詳細なる譯註を施され、かつグロッサリを附せられ、(イ)ウイグル譯は漢譯より翻譯したものなること、(ロ)本文は漢譯僞經なること、(ハ)ウイグル文にはこの外二種の譯本あり、大谷探検隊の堀賢雄氏發見の六〇數行のものと、ロシアのウラムチ駐在領事 Kotkov 發見三四行の斷片ありしこと、(ニ)最後に句點として“00.”の符號が用いられているが、此は摩尼教經典に用いられているが、この事實のみを以て經文を摩尼教のものとするの不可を説かれたものであるが、我ら後進は早く大正の初め「東洋學報」に發表されたものであるが、後年之に接してその學識の深きに驚嘆したことを想起する。

6 同じく橋氏がトルファンにて發見した「普門品」の第二章

四三行の斷簡の逐字譯にして、ウイグル文は漢譯より重譯したことを明らかにし、漢譯を對比しつつ、註釋を施されたもの。

7 A. Stein が一九〇七年敦煌發見のものにつき、仔細に漢譯本と對照しつつ、内容を考證し、譯文の特徴をあげ、書寫の時代を考へ(一〇三五年前とし)、ラテン字轉寫と譯註を行われたもの。

8 大谷探検隊員吉川小一郎氏がトルファンにて撮影せるもの(十一葉につき、此が法華經普賢行願品のトルコ譯なるを比定され、例により精緻な音譯、譯註を施されたもの。

9 明治の末年に近く、史學研究會講演集第三冊に發表され、國史家にも大いなる反響を呼んだ論文。入宋僧慶政上人が高山寺の辨良和尚(明惠上人)に送つた「南蠻文字」に關する研究で、まず資料の乏しい慶政上人の行蹟を明らかにし、彼が嘉定十年(一二二二年)泉州にて會つた蠻人實はベルシャヤ人が「シャーフ・ナーメ」の一節を書き送られたものであることを考定されたものである。

10 敦煌發見 國學叢刊第二巻に見ゆるマニ教の殘經について考察し、此が十二光明時の概念を詳述すること及びこの中に見ゆる明使(摩尼)阿駄(マニの三使徒の一人なる Adda)、二宗義、慕闍、佛多誕の意味等を闡明されたもの。

11 敦煌發見 富岡氏藏四〇五行の唐代の撰述に係る景教々典が、當代の二教と同じく、佛教語を借用した次第を實例を擧げて考證す。

12 敦煌發見 斷簡一七〇行にして、經名は Yēso Messiah 經の意味なるべしとし、本經の漢文の性質をのべ、ついで特異の語、末艸(Marie) 拂菻國烏梨師斂城(Jerusalem) 迹難(Jourdain) 谷昏(Johannes)を明らかにし、

13 同じく敦煌發見、天津の李盛鐸氏藏一五九行、書体よりして

唐末のものとし、メシヤが安樂道に至る道を説き、勝法の何たるかを説明するもの、全文を示し、博士は經中の岑穩僧伽—Seng. Simon Sang, 僧侶 Simon とし、本經と道德經との關係を（教義を唐室の近ずけんと）喝破されたもの。

14 博士が晩年、健康漸く衰えられた頃の力作で、前者は敦煌發見李氏の藏にかかる。全文を示し、佐伯博士の解釋を訂され、後者は經卷末三十行に當り、開元五年十月沙州大秦寺張駒撰の識語あるもの、この註釋中の用語が道德經の章句を借用したことを明らかにされたものである。

15 ル・コック刊、マニ教遺文卷三所収第八文書の一一七の波斯教殘經の一部に相當する古代トルコ文譯文につき、漢譯文とトルコ語譯文との對比が相互の誤を正すものとし（とくに漢譯の誤脱を補正）、第二十一文書に見ゆる摩尼の五戒、第三十一文書の佛教の阿難答の法問の條をそれぞれあげ、さらに摩尼經典の形式として第三十九文書（一一五）が佛典の貝葉の形をとり、細長き紙面に中央から左寄りの個處に穴を穿つことを指摘され、西人の留意せざるを補い、最後に第十四文書として収められたイソップ物語斷片に論及され、原文の音譯と日本語とを掲げて、この物語の東西文化交流上の意味に言及された興味ある論考。

16 ツェルファン出土斷簡 A・B 二葉、王樹枏より京大の有に歸したものの。各々の音譯と譯註を示し、つぎに地名 Gamui（これが初に現れ、Kangui（龜茲をさ）のもつ意義を力説されたもの。片々たる斷簡から重要な史實を探索される博士考證の妙を發揮された好論文である。

17 漢譯佛典が直接インドの原典から漢譯されたものでなくて、

中央アジアというイラン文化圏を通過し、一度中アの言語に翻譯され、これより漢譯されたとする佛典舊譯の性質は、今日では常識であるが、明治の末年この點を初めて教えられた鋭犀な論考。

18・19 西藏のタンヂェール所収千闥國縣記の寺本師による邦語譯が、じつは漢譯「釋迦牟尼如來像法滅盡因緣」卷一であることから説き、譯者法成についてバリのビプリオテーク・ナシヨナールに藏するその譯書の事を説かれたもの。

20 默賢可汗の女、毗伽公主これに關係ある人々の行實を歴史的に精しく考察し、玄宗の對突厥政策の實相に言及された力作。

21 まず唐の顯慶年間來唐のち拂菻國諸蕃招慰大使の稱號を帯びたる阿羅憾 (Arahant) なる人物を闡明し、聖教 (ネストリウス教) を通じ、唐と拂菻國間との關係交渉研究の一新史料たるを論定されたもの。

22 一九〇八年ベリオ博士が敦煌千佛洞よりえたもの（ビプリク・ナシヨナール藏ベリオ）、中唐以前敦煌地方に行われたる千字文漢字音のチベット字音による正確なる轉寫を韻別にテテン字音寫し、ついで現代北京音と對照して、漢字音の變遷を一目瞭然とされた雄篇。

23 一九二三年六月、北京の Le bulletin catholique de Pekin (X<sup>e</sup> année, N<sup>o</sup> 118) 掲載 L. Kervin のキタン文字の新資料に關し、この文字資料と解讀の努力を述べたもの。

24 馬沙亦黑なる人物は清眞釋義補輯に据り、洪武十五年（一三三二）華夷譯語の編纂に従事し、翌十六年（一三三三）天文經を譯し、一三七九年サマルカンドより支那に來れりとする誤を訂し、元末すでに支那に在り、元滅んで明に仕えたるものにして、那珂博士説と

異り、モンゴル人ではなく、かつ「元朝秘史」の漢譯に參加した證據なしとする。

25 今日、北京刊行の五体清文鑑は容易に入手しうるも、博士が明治の末年、内藤湖南博士に従つて奉天故宮にてこの珍籍を苦心撮影した次第から説いて、本書の由來を詳細に解説されたもの。

26 長崎通事らの共著になる兩書を撮影し京大、東大の東洋史研究室、東洋文庫に備えて學者研究の便に供された際に施された解説。

27・28 は北方アジアに行われたるシヤマンに關する該博な考證で、今日こそシヤマニズムの研究は旺となり、一通りの知識は一般化した。が筆者などは28の論考を幾度か熟讀して啓發されたものである。

29 は姑く措き、30の論文について一言する。初唐からの文獻に見ゆる「祇」の字の由來に關して博引傍證、考證の妙を盡され、結局この語は「天」を意味する初唐關中地方の音 *Kien* と斷じ、また史記以下に見ゆる祈連山の祈連につき漢書の武帝本紀(天漢二年五月の條)の天山に附したる顔師古の註「即祈連山也。匈奴謂天爲祁連。云々」の原義を考えられ、「天」なる漢語を訛つた匈奴語をさらにこれを匈奴語として、漢字で寫したものと斷ぜられた(これに關するものとして藤田博士の別考がある。)

31 最後の雄篇は、渾脫舞は一種の渾脫(牛羊などの内臓を膾子として被つて舞うたのに由來するとし、その原音を蒙古語 huta に求められたもの。)

雜纂二十六篇は、中央アジア史關係書の解題あり、紹介あり、「二葉叢書第一號を讀む」は、單なる紹介でなく探檢史あり、探書(く觀無量壽經の解讀についての批評を含む。)の苦心、紀行・見聞記あるの外、東西の東洋學の碩學のプロフィール

を描く數篇がある。東は白鳥、内藤、狩野、濱田諸先生のそれぞれの學風、人と爲りを傳えて、親しく警咳に接せず又は親炙しえなかつた後進にとつて興味深く、中にも筆者が今に忘れ難く感銘を刻まれた一篇は、「藝文」誌上に載せられた「ラードロフ博士」追想の一文である。博士が大正三年八月の某日午後、フィンランドの一寒村のダーチャに老トルコ學者を訪れた折の兩博士の火の出るような學術上の熱意と、そして第一次大戰後の食糧不足による榮養失調で倒られたという一ハルビン紙の計報に接して、運命が異邦の老學者の報いるところの餘りに慘かつ殘酷なるを悲まるる先生の筆は、當時年少の筆者は哀痛の情を以て讀んだ記憶がある。

先生は文章家としても、實にすぐれておられた。隨筆には論文に見られぬ滋味が溢れ、時にユーモアすら見られる。筆者は年若い東洋史の學徒には、難解な論策よりも、まさかか興味あつてしかも不知不識の間に、學問の門徑に入らしめる隨筆——清朝風に割記と呼んでもいい——から讀み始めることを奨めるものである。

最後に重ねて云う。拙稿は、先生の一字一句苦心の雕琢になる三十一の雄篇の眞を傳え得なかつた事を遺憾とするものである。然し後の東洋史家は必ず之を措いては、斷じて藝外・中アの歴史を論ずることは出来ないものである。

經濟的にも、技術的にも、いくたの困難を排してあえて刊行された編纂諸位の勞を多とし、併せて本書がヨーロッパの學界に洩れなく知らるよう取計われんことを、少しでもヨーロッパの事情を知一人として希望せざるを得ない。蛇足を附記して擲筆する。

(小林高四郎)